

〔例〕学校設定科目「壬生さがし」

【使用史料】

- ・座禅院昌淳官途状（当館寄贈 手塚玄家文書 No.21）…①
- ・野州壬生御城図（当館所蔵 その他の史料 No.93）…②

本時のねらい

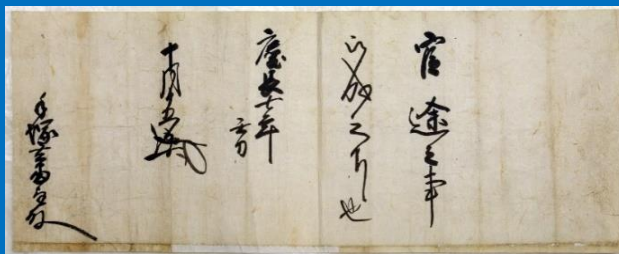
- ・近世の城下町においては、居住地が身分によって分けられていたことに気づく。
- ・実在した「壬生城」の姿を思い描き、他の城下町との相違点に関心を持ったり、現在の壬生町の土地と当てはめて考えたりする。

導入：壬生に関する古文書を見る

問い：この古文書（①）は、壬生氏の一族が出した手紙です。どこからその情報がわかるのだろうか？

- ・古文書の見方・読み解き方を学ぶ。

官途之事
被成之下候也
慶長七年壬寅
十月十五日
（花押）
手塚玄蕃丞殿



文書館職員は、史料を扱う上での注意点（手洗い、マスク、ボールペン・シャープペン使用不可等）を伝える。

（当館寄贈 手塚玄家文書）

前テーブルに置く。

- ①古文書の内容を簡潔に説明。
- ・花押は武将のサイン。
- ・壬生氏は、戦国時代には存在している。

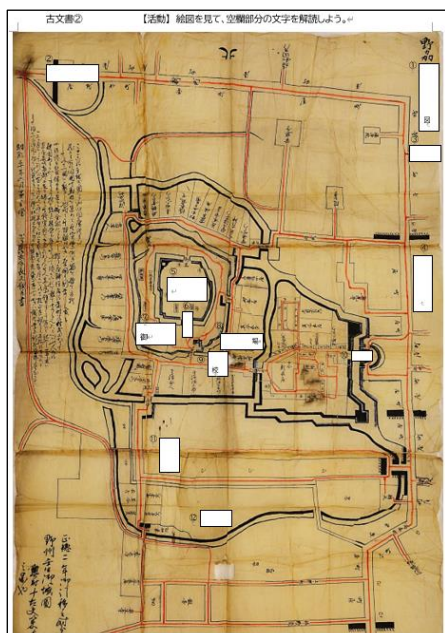
展開：「壬生城図」を読み解く

- ・都市としての城下町・壬生の姿を史料から読み取る。

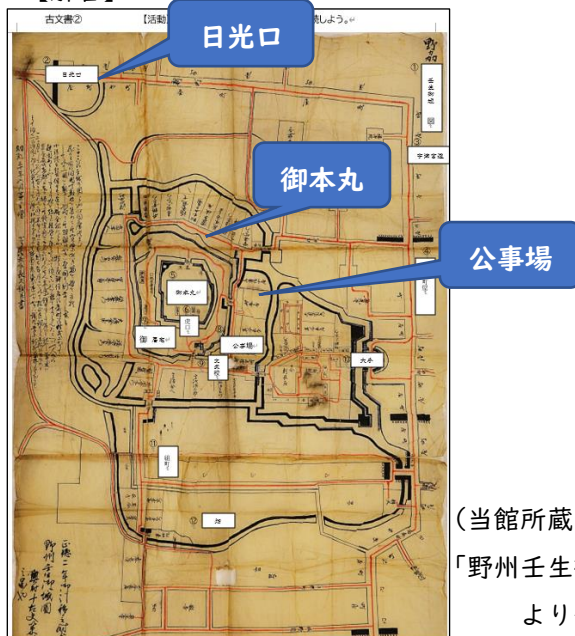
問い：これ（②）は、何の絵図だろう？さらに、古文書の文字を読み取り書き出してみよう。

- ・グループごとに史料を見て触れる。
- ・グループで絵図から「本丸」「御居宅」「畑」など諸施設の名称を読み取り、ワークシートに記入する。

【生徒に配布したワークシート】



【解答】



（当館所蔵
「野州壬生御城図」
より作成）

問い：城の中心部は本丸ですね。本丸に住んでいたのは普通に考えると城主（殿様）ですが、壬生城の本丸は、壬生藩主以外の人も利用していたそうです。それは誰か、考えてみよう。

生徒の声

壬生は、江戸から日光に行く時に立ち寄る場所なのかもしれない。

絵図中の「日光口」に着目させ、江戸時代、日光と関わりが深い人を連想させる。ヒントとして3択にすることも可能。

- ① 宇都宮藩主 ② 日光山別当 ③ 将軍

※本丸は、将軍の日光社参の時に使用された。なお、壬生城主は二の丸の南西部分にある居宅に住んでいたと考えられている。

問い：家臣はどこに住んでいたのだろう。また、町人はどこに住んでいたのだろう。

生徒の声

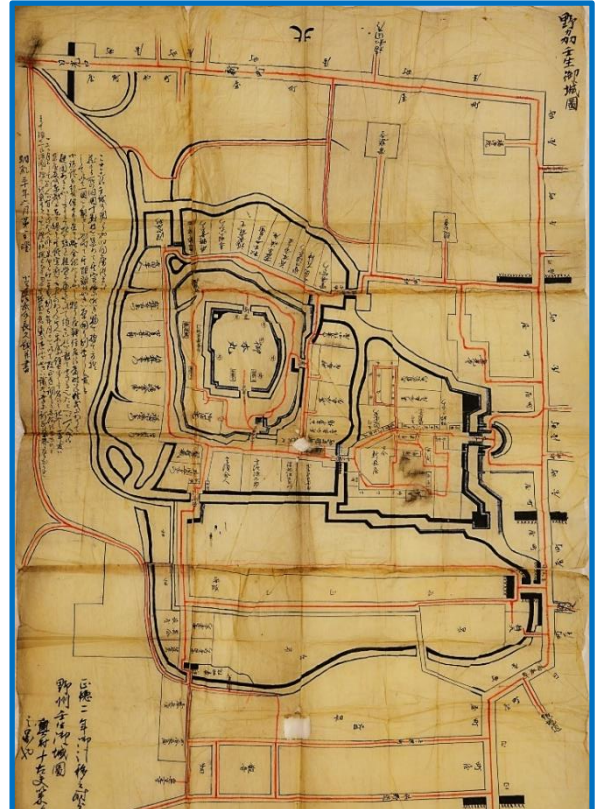
公事場や文武校は武士に関わることだから、本丸に近い所に武士がいる。

町人は町家という区画に住んでいる。

町家は絵図のまわりの方に書かれている。

・近世の城下町においては、居住地が身分によって分けられていたことに気づく。

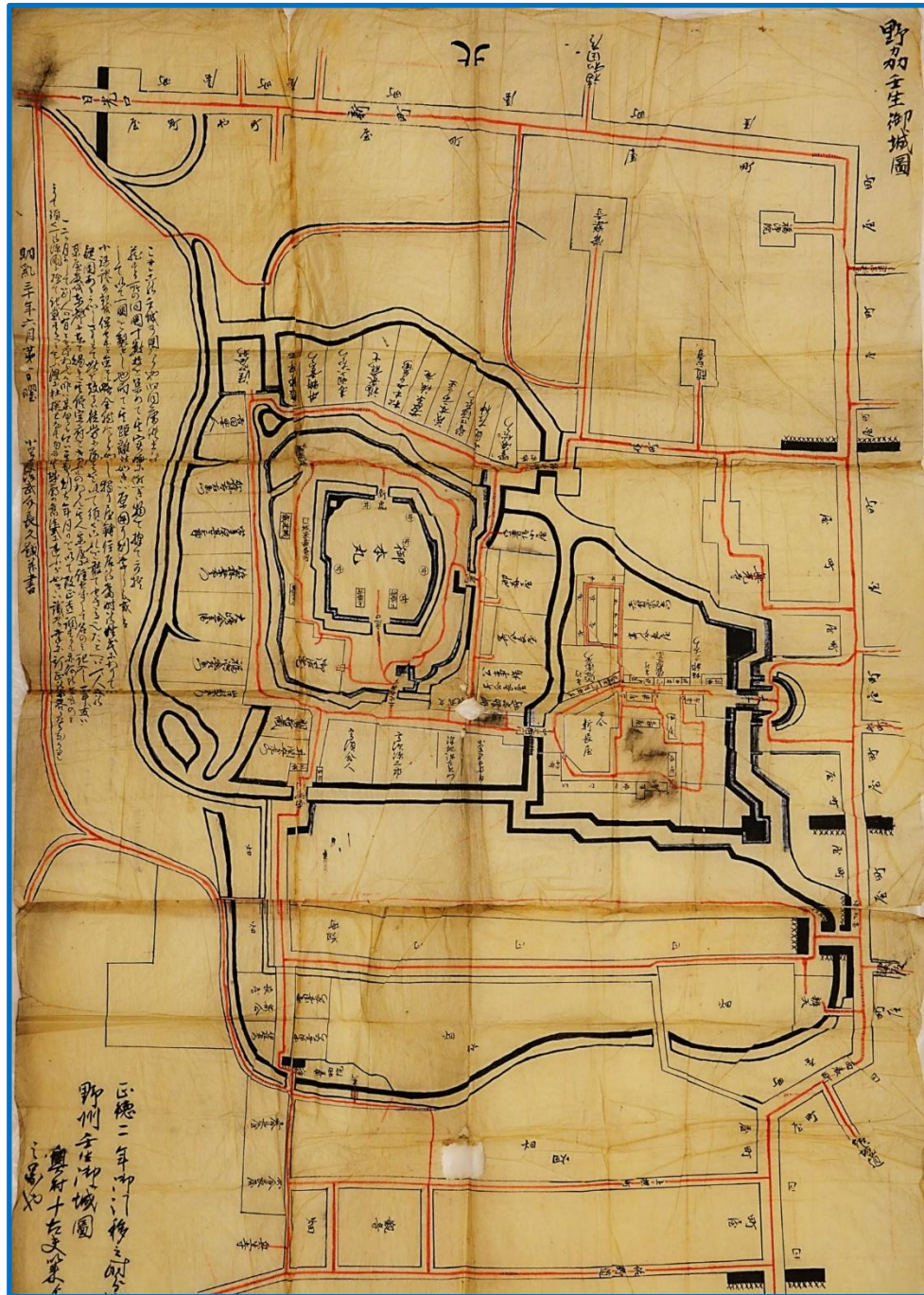
※現在の地図との比較もできます（地名や寺院の位置、道の形などに注目）。



(左) 地理院地図

(https://maps.gsi.go.jp/#15/36.424598/139.800053/&base=std&ls=std%7Cort_1928%2C0.59%7Cort_USA10%7Cort_riku10&blend=100&disp=1111&lcd=ort_riku10&vs=c0g0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0) より

野州壬生御城図（当館所蔵 その他の史料）



【壬生城解説】

壬生城は、中世～近世にかけての平城である。本丸には、他のほとんどの関東の城と同様に天守はなく、将軍の日光社参の時の旅館となる御殿が建てられていた。また石垣もなく土塁のみで囲まれ、本丸の他、二の丸、三の丸、東郭、下台郭、正念寺曲輪の全部で6つの曲輪から校正されていた。

城下町は、城の東側を南北方面に通る日光街道壬生通り沿いの通町と、城の南側の表町から成り立っていた。特に江戸初期は、城の正門にあたる大手が南側にあったため、表町が中心だったが、元禄5年（1692）頃大手を東側に移してからは通町が中心地になった。

※「壬生城絵図」を読む（『学校教材史料集』6号より）